

あいさつ | 6 平成15年 年頭の所感 ●文部科学大臣 遠山敦子

特集 文化芸術の振興について

- 巻頭言 16 文化芸術の振興について ●河合隼雄
- インタビュー 18 ●野村萬斎
22 ●鴻上尚史
26 ●牧阿佐美
- 事例紹介① 30 自己表現力を身に付けさせ、生きる力を育てる教育課程の研究開発
●鹿児島市立伊敷台小学校
- 事例紹介② 32 演劇教育をとおして豊かな情操を育成 ●兵庫県立宝塚北高等学校
- 事例紹介③ 34 東京芸術大学における新たな取組について ●東京芸術大学
- 事例紹介④ 36 学校と博物館のよりよい関係づくりを目指して ●川越市立博物館
- 事例紹介⑤ 38 芸術文化創造の拠点施設としての取組 ●愛知県長久手町文化の家
- 基本方針 40 文化芸術の振興に関する基本的な方針(閣議決定)
- 解説 52 文化芸術の振興に関する基本的な方針について ●文化庁長官官房政策課

特別記事 「心のノート」の活用について ●初等中等教育局教育課程課

- 56 「心のノート」の活用について
61 「心のノート」の活用例
64 道徳教育について

- 84 編集後記
- 83 鑑賞席
- 82 都道府県発
教育・科学・学術・文化・スポーツニュース
●和歌山県、大分県湯布院町
- 78 海外最新情報
- 76 レットトライ！
●国立吉備少年自然の家
- 74 地域の産物を学校給食に
●大規模給食センターにおける
地場野菜の導入
- 72 科学技術のフロンティア
●宇宙へ向けて新たな挑戦
- 70 新しい科学技術の重点分野
●地球環境変動のカギを握る海洋
- 68 子どもと企業のクロスロード
●学習の到達度を確かめる「技能検定」①
『音楽技能検定』
- 66 国際教育協力―現場からのレポート
●アフガニスタン 寺子屋第一号
- 14 審議会の動き
- 12 であいふれあい ●林家こぶ平

カラー

表1 温故知新

表2 温故知新

表3 温故知新

1 ところ・ひと

●国立中央青年の家

●天城山隧道

●高速飛行実証計画

牧阿佐美さん

—プロフィール—

まき・あさみ 橋秋子と牧阿佐美バレエ団を設立、プリマ・バレリーナとして数々の作品に主演。橋の没後、牧阿佐美バレエ団主宰者、橋バレエ学校校長。日本を代表する舞踊手を数多く世に送り出す。振付家として活躍の一方、海外より著名な指導者や振付家を招き、国際共同による質の高い舞台制作を手がける。平成11年7月より新国立劇場舞踊部門芸術監督に就任。



●新国立劇場舞踊部門芸術監督としての今後の抱負は。

世界に恥じないバレエ団の公演をしたいと思っていますが、まだ五年しかたっていないせん。海外で名門といわれている劇場のバレエ団は一〇〇年以上の歴史を持つところがほとんどです。そんななかで一日でも早く、世界と肩を並べられるレベルを目指していきたいと思っています。

ただ、レベルを上げるといことは、稽古だけではまったくできないものです。舞台を踏んでいろいろな作品を踊ることによってアーティストとして育ちますから、そういう意味では幅の広いレパートリーを公演していかないといけない。いつも『白鳥の湖』しか踊らない人は、本当に『白鳥の湖』だけで他のものになつたらどうやって踊っているのかかわからなくなってしまう。

そういう意味ではやはり、世界の名門の劇場としてやっているバレエ団と同じレパートリーを、徐々にここにも入れ始めています。最初は、ある程度型の決まっているクラシックバレエから始めないと難しかったと思うのですよ。でも、ダンサ

代の体型を調べてダンサーの適性を見て将来プロとして踊っていきけるのかどうかを審査します。

新国立劇場では、なかなかそこまでできませんでしたが、外国から来る先生方も皆、『どうしてこの短い期間にこれだけよいダンサーがそろってきたのか』と誉めてくださいます。

教えるほうも、ダンサーも本当に真剣勝負でやっていますので、国立のスタイルが出てきましたから、これはすごい成長だというふうに私は思っています。

●五年間で観客も変化しましたか？

そうですね。最初は冷たい目で、『どうせ寄せ集めでしょう』と批判的なご意見もあったのですけれども、今は「すばらしいですね」という言葉も多くなりました。観客もよいものを理解してくれるようになってきています。劇場を愛していただいていますし、いろいろな意味で踊り手も観客も育ってきていると思います。

●能楽との共演など、新しい試みもされていますね。

バレエと能楽の共演で『胡蝶』をやらせていただいたのですが、藤田六郎兵衛

ーも一生懸命ですし、新国立劇場は公演回数が多いですから、だんだんとですが、短い期間にレベルが上がってきました。

ダンサーがいろいろな角度から表現できる経験を経て、その後に日本人が持つ美しさが出てくると思います。今は世界共通の演目をやらないといけません。日本でしかできないものを踊っています、孤立してしまいます。世界と同じように、いろいろな作品をやっているところです。

テクニクだけでなく、歌うように踊ることができたり、芝居がはっきりわかるように表現できるようになったことが、この五年間の成果だったと思います。やっと国際的な作品をもちつてこねせるところまできましたから、少しでも毎回レベルアップするために努力を続けていきたいです。積み重ねてよいものを作っていくかないと、バレエというのは貯金がないのです。常に勉強していかないといけないのですから。それに、世界は先にいってしまふ、待ってくれるものではないですからね。

こうして日本を含む多様な作品を上演することが、お客様の要望にお応えする道でもあると思っています。

先生の能管でバレエをどのように振り付けられるか、難しいものがありました。今回、お引き受けしましたのは、お能もバレエも古典であり、文化的背景は違っても共通するものがあるように思っていたからです。

バレエというのはメロディがすごく歌い上げられて、音楽で踊るようになっていきますから、オペラの歌に近いのです。能の笛一本というのは、バレエにとって独特です。フルートならメロディがありますが、能管にはありませんよね。

能管は大変宇宙的な感覚を持っていると感じました。ですから、『胡蝶』という題材による制限があれば、すごく新しいものが作れると思いました。もう少し感覚的なものでバレエをやるのも、もちろん一晩ものとか、二時間、三時間は無理ですけども、小品としてやれば、なかなか変わったおもしろいものができるなど。今回の仕事の中で発見したことですね。

●新国立劇場でもバレエ研修所が設立され、若手の育成にあたっておられますが。

すばらしい人間でなければ、人を感動

また、世界の方に「日本に新国立劇場バレエ団というなかなかよいバレエ団がある」と、口にしていただけるようにならないといけない。日本だけで「よかった」「悪かった」と励ましあっている、何ものもないと思うのです。ですから、これから任期二期目の三年間、短い期間ですけれども、それを目指して進めていくことが、私の仕事だと思っています。

●新国立劇場バレエ団の長所は？

やはり劇場がよいですから、装置なども映えます。踊り手もプロフェッショナルとして毎日、朝から晩まで訓練や演技指導も受けてやっていますから、五年前とはまるきり違っています。

日本各地からオーディションにより入団したダンサーたちが、初めから新国立劇場のスタイルを持っていたわけではありませんでした。それが、このごろはバレエ団のスタイルが出はじめて、みんな似た雰囲気になってきました。それがひとつの団体なのです。個性を生かしながら、スタイルがだいたい確立してきていると思うのです。

外国では、バレエ学校の入学時、親三

させる演技はできないと思います。技術で回った、飛んだといってお客さまがワツと喜ぶことはできても、本当にアーティストになるには精神的にもう少し落ち着いてものが見える人間にならなければいけないと思うのです。

そのために、バレエの稽古はもちろん毎日三時間くらいやるのですが、それ以外にバレエの歴史、音楽などについて学ぶ必要があります。例えば『白鳥の湖』で踊るときに、ここの部分ではどんな楽器がメインなのかなど、先生に教えていただいで勉強しています。

また、踊りの勉強だけでなく、『サロン』を設けまして、各界で活躍されている方々をお迎えして、いろいろなお話をしていたたく。舞台芸術の方がほとんどですが、財界の方にもきていただいたり、バレエ協会名誉会長の島田先生に、日本のバレエの成り立ちについてお話を聞いたりました。

『サロン』は、お話を聞きするだけでなく、自分から話をする場でもあります。人前に出たら、聞くだけで何も話さないというのではなく、お話ができるように慣れていくことが大切です。心の豊かさ、これだけの人が動かなければ、これだけのものができることを見せ、また二幕目の見所も説明して見せるという。こうした舞台創り全体を見てもらうことが、観客を広げるという意味で、できたらよいのではと思います。

ただそのためには、会場やスタッフを一日余計に押さえないといけないので、助成金でその部分の補填が図られると有難いです。

それから、文化庁が舞台芸術について、情報提供の番組があるとよいですね。劇場にしても何にしても、宣伝まで手がまわりません。大きい新聞はニュース性がないと書かない、新人でないと言えない部分があつて、宣伝のしようがないですよ。

そこでバレエでも歌舞伎でも音楽でも、いづどこで何をやっていますと、お客さまがその番組を見れば、やっているものがわかるというところがあればいいですね。プログラム紹介のほかに、ときどきインタビューでも、公演でも少し流すものがあつてもよいです。

外国だと、国によって文化庁の中に強力な宣伝部があると聞いています。日本

吸収する幅が出てくるのが第一かなと思つています。

研修というのは、即、プロで使えるということなんです。たくさん勉強をした後に、アーティストとしての入り口にたどりついたわけですね。即、世界的なブリマということは無理で舞台経験がなければいけない。卒業はさせますけれども、オーディションを受けてどうなるかということになります。

研修生が新国立劇場バレエ団のオーディションを受けたときに、二年間どのよう勉強をしたのか、みなさんの話を聞いて、心で感じて自分のものになったかが、オーディションの表現の中に出てくると思うのです。

舞台では指導者が違えば、違うことが要求されます。例えば、同じ「泣く」でもいろいろな泣き方があるし、いろいろな種類の悲しさがあるわけじゃないですか。

研修生には基礎はきちつと入れて、いつでもそれを取り出せる引き出しが持てるような勉強をさせたい。

私が子どものときも、母に何か言われてもきかないのですよ。でも、お茶やおでも文化庁の中にそういうところができないかと思つています。

文化庁は、芸術の発展のために多くの支援を行っているのですから、そうした活動をもっと具体的に一般の方々にわかるように、宣伝広報を強力に推し進めていただきたいです。

●今後の抱負をお聞かせください。

さい。舞台芸術は人間の営みのなかでは、なくてはならないものだと思います。舞台芸術を通じて、喜びや哀しみといった深い感動を感じることが出来ます。これは普段の日常生活の中では体験できないことで、人間にとって大切な心を育てるために必要なものですね。

ですから、この劇場に来たら、いつでもよいバレエをやっているという状態になればと思います。海外から日本に来られた方に、日本の文化を見せるということとで歌舞伎を観ていたことも大事なのですが、言葉が必要ないバレエは世界共通の芸術なので、バレエを観てもよいわけなのです。

海外からのお客さまに日本のバレエなり、オペラなりをアピールしたいと思ひ

花の先生に言われると、それがもつともらしく聞こえることがあります(笑)。いろいろな先生方についた方がよいと思つています。

●子どもたちをはじめ、多くの人に文化に親しんでもらうためには？

本当にバレエ、オペラ、演劇などを理解して、観る力をつけて好きになつていただくということは、子どものときからよいものを見せるしかないです。

前に宝石の鑑定士の方とお話をしたのですが、最初から本物をみせないで、簡単なものは鑑定できても、イミテーションの性能のよいものは本物と区別できないそうです。子どものころから本物に目と身体を通じて触れていけば、本当によいものを見分ける力がつくようになるのです。

ですから、劇場にお子さんがこられればよいと思います。本番のときは大変かもしれないので、リハーサルを見せるのがよいと思います。劇場を見て、舞台を見る前にこれから始まることを説明してもらつて、舞台を観て休憩後には、装置転換をして……と。こんなに人が働いて、

ます。これだけよいものを作つても、日本人だけで楽しんでいただくで、世界に発信しなければいけないのです。

地方で『ジゼル』をやったときに、ご家族で初めてバレエを観た方が、「終わって立ち上がれないほどの感動だった。言葉のないものがこれだけ私たちに、悲しみや喜びを伝えるという、嘘みたいな芸術があつたことを初めて知りました」と言われました。

ですから、もつといろいろな人に見ていただければ、言葉がないだけに自分の環境なり、自分の発想でつなげられます。言葉がなくても国際的な芸術なので、アジアからいらしても、ヨーロッパからいらしても、ぜひ観ていただきたいと思ひます。それによって広がっていくのです。私たち出演者だけが頑張つても、小さな力ですから、みなさんのご支援を今後ますますいただきたいと思います。(インタビュー・構成／文化庁長官官房政策課)



特集

核融合研究開発について

●巻頭言

井上信幸

●座談会

岡野邦彦／小西哲之／
鳥井弘之／本島 修／大竹 暁

ところ・ひと

物質・材料研究機構

であい・ふれあい

八木沼純子

編集後記

▽新年あけましておめでとうございます。皆さまには、どのような新年をお迎えでしょうか。昨年末から年始にかけての休暇が例年に比べて長期だったこともあり、ゆつくりと休養をとられた方も多かったのではないのでしょうか。

▽さて今年の干支は未年。おだやかで明るいニュースの飛び交う年であってほしいものです。

▽今年最初の「ところ・ひと」は「国立中央青年の家」です。正面に屏風のようにそびえる冠雪の富士山が新年号にふさわしい雄姿を演出してくれました。

▽昨年、二月五日に高階文化審議会会長から遠山文部科学大臣に対し「文化芸術の振興に関する基本的な方針について」答申が行われました。

同答申では、政府の各種審議会の答申としては異例な形ではありますが、各委員の熱い思いを端的に表すため、『大地からの手紙』という散文詩も冒頭に掲げられております。今回の特集ではこの答申を踏まえて「文化芸術の振興について」というテーマで、河合長官の巻頭言、三名の方のインタビュー、事例紹介、答申の解説等を交えて構成しておりますのでご覧ください。

▽当誌も『文部科学時報』と誌名を変更してちょうど二年が経過しました。皆さまのご指導を賜りながらより一層誌面の充実に努力してまいります。

今年も『文部科学時報』のご愛読よろしくお願いたします。（世）

投稿歓迎

「読者からのたより」欄への投稿、「文部科学時報読者アンケート」を歓迎します。本誌を読んでの感想、御意見等をお寄せください。

- 「読者からのたより」投稿規定
 - ①1件につき400字以内 ②住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記（誌上匿名可） ③掲載分には薄謝進呈
- ※文章を一部手直しさせていただくことがあります。
- 〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2 文部科学省大臣官房政策課「文部科学時報」編集部
- ※電子メールでも受け付けております。
- 「文部科学時報読者アンケート」
 - 文部科学時報読者アンケートは添付のはがき
 - のほかに電子メールでも受け付けております。
 - 宛先名「jiho@mext.go.jp」

コンピュータネットワークを利用した文教行政の広報

文部科学省では、我が国の文教施策等を広く皆様に紹介するため、インターネットホームページを利用して情報を提供しています。また、子どもホームページを設け、情報を提供しています。

ホームページアドレス：
http://www.mext.go.jp/（半角入力）
子どもホームページアドレス：
http://www.mext.go.jp/kodomo/index.htm

MEXT.61 月刊

文部科学時報 1月号

第1520号

●著作権所有——文部科学省

●発行所——株式会社 きょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-16
電話 03-5349-6666（営業部）
URL http://www.gyosei.co.jp

●印刷所——きょうせいデジタル株式会社

平成15年1月10日印刷
平成15年1月10日発行

定価610円（税別581円）（〒84円）
年間購読料7,320円

・ただし、増大号、臨時号の場合は別に代金を申し受けます。
・なお、購読のお申し込みは直接営業所またはよりの書店にてお願いします。

本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、それぞれ筆者個人の見解であることをお断りいたします。

Printed in Japan 2003 ISSN 1346-325X ●この刊行物は再生紙を使用しています。